

実践報告

思いを造形活動につなげる図画工作科の授業づくり
— 小学校第一学年の工作に表す題材を通して —

中野 和幸*

A Lesson Plan of Art and Handicraft to Connect an Imagination
of a Child with Modeling Activities:
Through the Theme Expressed in the Work of an Elementary School First Grade

Kazuyuki NAKANO*

【要約】

図画工作科において「思いを造形活動につなげる」とは、造形活動の中でもつ児童個々の思いを、児童が実際の形や色などに表しながら、持ち続けている姿である。本稿は、造形的な見方や考え方を働かせて、主体的に思いを表出する児童の育成を目指し、児童の思いや活動の予測と教師の具体的な支援を設定した「サポートプラン」の作成・活用、学習環境の工夫、各時間の導入・終末の工夫を柱とした第一学年の実践をまとめたものである。

【キーワード】

児童の思い、つなげる、「サポートプラン」、学習環境の工夫

1 主題設定の理由

平成27年2月に国立教育政策研究所が示した「小学校学習指導要領実施状況調査の結果のポイント」では、表したいことを見付けて表すことが図画工作科の課題として挙げられている。その指導上の改善点として、表したいことを自分で見つける学習を充実するなど、児童一人一人の創造性を一層高めることが重要とある。また、平成28年12月に出された中央教育審議会による答申（中教審第197号）において、現行学習指導要領の課題として、感性や想像性等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成すること等で、更なる充実が求められていると述べられている。

造形活動において、児童は、材料を目の前にし、見たり触れたりしながら様々な視点で材料の特性を感じ取り、自分のイメージをもちながら、思い付いたことを形や色などに具現化しようと試行錯誤する。また、具現化した形や色などに、より明確に自分のイメージが表れるように、新たな材料や道具を用いようとしたり、他の表し方がないか考えたりする。そして、形や色などに具現化できた成功体験や、具現化しようと試みる中で得た気づきを再認識することで、達成感を得るとともに、自信をもって新たな活動に取り組む姿が見られる。このような造形活動の経験を積むことで、児童はつくりだす喜びを味わい、造形活動を通して得た資質・能力を、別の題材や生活、社会の中にも生かそうとすることができるようになっていくと考える。

そこで、児童一人一人が表したい思いをもち、感性や想像性を働かせ自らの創造性を発揮するために、題材全体を通して、児童一人一人の必要に応じた指導の在り方や手立てを探る必要がある。

*佐賀大学教育学部附属小学校

以上のことから、児童が思いをもとに、造形的な見方や考え方を働かせながら、主体的に造形活動に取り組むことを通して資質・能力を育成することができるように、教師の具体的な支援の在り方を検討し、低学年の実践を通して授業改善を図ろうと、本主題及び副題を設定した。

2 研究の目的

本研究では、題材を通して児童の思いを造形活動につなげるために、教師の具体的な指導の在り方の検討を行い、小学校第一学年の授業実践においてその指導の有効性を検証し、授業改善を図る。

3 研究の内容

(1) 児童の思いと「造形活動につなげる」について

本研究では、造形活動の中でも児童の思いを以下の三つとして捉える。

- ・ 授業や題材の導入時にもつ、「やりたい」「〇〇を表したい」という造形活動へ向かう思い。
- ・ 主に題材を展開する過程でもつ思い。活動しながら「もっと色を塗りたい」「別の材料を使ったらどうか」と試行錯誤する中で生まれる、具体的なイメージを伴った思い。
- ・ 授業や題材の終末時にもつ「思い通りにできて楽しかった」「こんな活動に生かせそう」という次の学びや実生活へと向かう思い。

このような思いを、児童が自らの感覚や活動を通して、形や色などに表しながらもち続けている姿を、造形活動につなげている姿と捉える。

(2) 教師の具体的な手立てについて

児童は、いろいろな関わりの中で造形活動に取り組んでいく。自分の作品との関わりを中心に、教師、学習環境、自分や他者と関わりながら、思いを明確にし、持続して造形活動に取り組むことができるように、次の3つの柱を具体的な手立てとした。3つの柱は独立するものではなく、相互に関連して設定している。

ア 児童の思いと活動を見る指標となる「サポートプラン」の作成（柱1）

「サポートプラン」は、その題材で育成を目指す資質・能力が十分に発揮されるように、個々の思いと活動に応じた評価と指導を行うための指標である（図1）。左から右へと時間が進み、下から上へと児童の思いが実現に向かっていく。児童全員にもたせたい思いや姿を評価規準と照らして時間ごとに設定する（図1○囲み）。また、児童の思考や姿、つまづきなどを題材の展開に沿って予想する（図1△囲み）。そして、左上に発想や構想面について、右下に技能面についての支援の具体案を、児童の姿に即して検討し設定する（図1▲囲み）。「サポートプラン」の作成により、教師は、児童の目線で活動を捉え直し、資質・能力が発揮される姿を具体的にイメージしながら、児童の思いをくみ取って指導することができると思う。

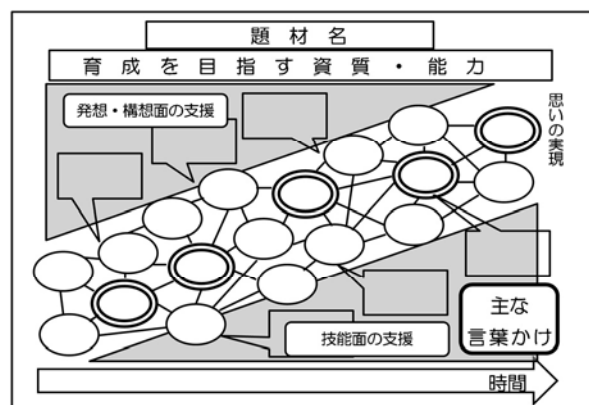


図1 「サポートプラン」(枠)

イ 形や色などにこだわる造形活動を引き出す学習環境の工夫（柱2）

主体的に造形活動に向かい、材料や人などに関わりながら新たな活動を思い付き、その思い付いたことができるように学習環境を工夫する。学習環境とは、児童が造形活動を行う空間であり、活動場所、材料、掲示物を指す（表1）。活動場所の工夫では、造形活動に適した場所の選定だけ

でなく、机や材料、掲示物等の配置を工夫し、材料や友達と関わるようにする。材料の工夫では、題材のねらいに即して種類と量を吟味する。例えば、いろいろな活動を試す中で発想を広げることができるように、種類を厳選し、量を多くする。掲示物の工夫では、発想や構想、技能面の手助けとなる掲示を行う。例えば、基本的な活動の流れ、イメージをふくらませる画像や言葉、材料の使い方や組み合わせ方の例、用具の使い方等である。また、児童が活動を通して見つけたアイデアや方法等も掲示する。

表1 造形活動を引き出す学習環境とその目的

学習環境		目的
活動場所	・造形活動を展開する場所 ・活動形態（個やグループ） ・机や椅子、材料等の配置	・安全 ・材料や人との関わり
材料	・種類と量の吟味 ・補助材料の準備	・発想の手助け
掲示物	・活動手順 ・用具の使い方 ・児童の気付き	・発想・構想 ・技能面の手助け

ウ 児童が思いをつなげる各時間の導入と終末の工夫（柱3）

造形活動の過程で立ち止まり、活動の方法や方向を確認する場として、授業の導入と終末時に、思いを表出し確認する時間を設定する。導入時では、これまでの生活経験や造形活動を振り返り、題材のねらいと自分の思いに即して本時の活動への見通しをもたせる。終末時では、作品など本時に表出されたものをもとに、その時間に取り組んだことや工夫したことなどについて振り返り、今後の活動への焦点化を行う。また、思いを確認する際に、活動過程に目を向け、活動の変遷をたどることができるように、ICT機器やポートフォリオを活用する。

4 授業の実際

(1) 題材名「なにが出るかな〜びっくりハッピーボックス〜」

実施児童：第1学年2組 35名 実施時期：平成29年2月

(2) 題材について

本題材は、ストローで息を吹き込んでポリ袋を膨らませる仕組みから思い付いたものをつくり、箱を飾ってびっくり箱にするという、工作に表す題材である。ストローとポリ袋を接合して仕組みをつくること、袋と箱とを組み合わせること、出てくるものを考えてつくることといった行程がある。題材を通して、材料に触れたり、膨らませたりしながら表したい思いをふくらませ、形や色、組合せなどを工夫して自分の思いを実現させようとする力の育成をねらった。また、できた作品を幼稚園児と一緒に膨らませて楽しむことを目的に、作品への思いを持続して活動することを期待した。本題材の「サポートプラン」と展開を、図2に示す。

(3) 抽出児のプロフィール（造形活動での特徴と本題材での期待）

柱が有効であったかを検証するために、次の3名（表2）を抽出し、主に造形活動の展開部分である3時目（図2の1回目）の抽出児の様相と、学級全体の題材後の様子について述べていく。

表2 抽出児のプロフィール

	A児	B児	C児
造形活動の特徴	積極的に造形活動を行う。具体的なイメージをもってつくり続けることができる。	作品づくりに慎重で、造形活動を思い付くまでに時間がかかり、途中で止まることもある。	丁寧につくつくつくが、そのときの気分で作品をつくるが多い。
本題材で期待する姿	自分の思いに向かってつくり続けている姿や、その過程で働かせている力を他の子に伝え、活性化してほしい。	発想段階でいろいろな造形活動を進めたり友達と関わったりしながら思いをもち、自信をもってつくり続けてほしい。	自分の思いにこだわりをもってつくるとともに、いろいろな方法を試す中で新たな工夫にも目を向けてほしい。

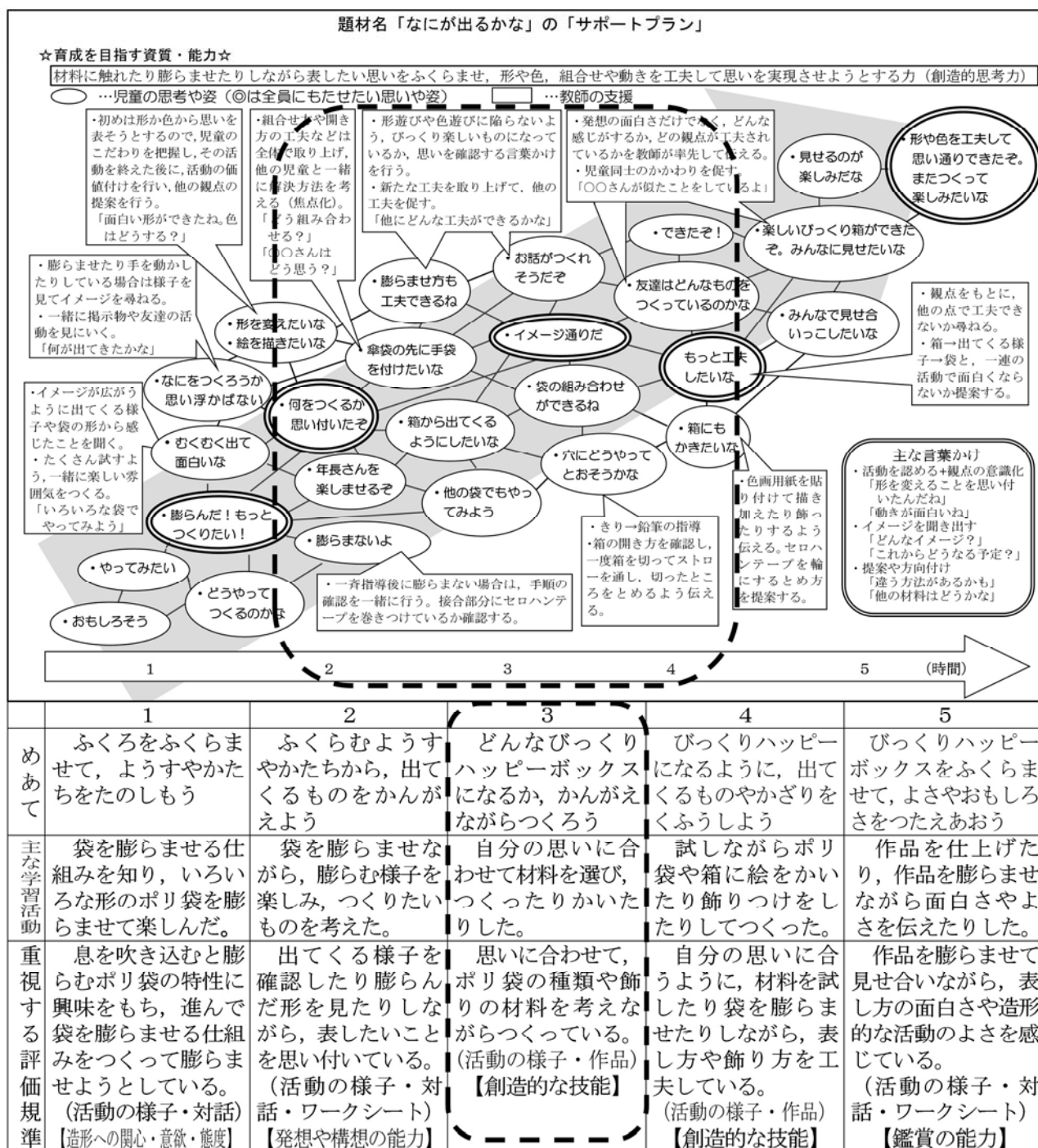


図2 本題材の「サポートプラン」と展開（全5時間）

(4) 「サポートプラン」に基づいた支援の有効性について（柱1）

児童個々にもった思いやイメージを大切にしながらつくり続けることができるように、各時間、導入で見通しをもたせた後は極力児童の活動を止めず、「サポートプラン」に基づいて児童の活動を見て、それに応じた言葉かけを行った。ここでは、3時目のA児への関わりとA児の変容を中心に、「サポートプラン」の有効性を述べる。

A児は試しの活動において、手袋を膨らませて人形をつくることを思い付き、その人形を複数つくろうと考えた。2時目は手袋を下向きにし、指の部分を生かして手足に見立て、「手ぶくろマン」をつくりあげている。作品の完成イメージを具体的にもって造形活動を進めていたA児は、3時目に「手ぶくろマン」を複数つくり、それらがとび出た時に手を握っているようにしたいと考え、友達に相談していた。以下、A児と周り児童、教師との関わりの様子を示す（表3、図3）。

表3 3時目におけるA児と周りの児童、教師との関わりの様子 (T:教師 A児:抽出児 S:その他の児童)

(A児:2つの袋をつなげて、手を握っているようにしたい。)
 A児:ここここをつなげたいんだけど。
 S1:なんか、小さな袋を両方ポキッととしてつなげるとか。
 T:小さな袋をつけるね、他にアイデアない?①
 S1:ここに手袋をつけたら?
 A児:袋を合わせたら…
 T:つなげたいって。どうしたらいい?(他の児童に尋ねる)②
 S2:手をつなぐように、手袋の先を切ってつないだら?
 S1:手をつないでいるように、空気が漏れないようにして。
 S3:確かに、それいいね。
 S1:袋1個でできるよ。
 T:穴を開けて袋にするか、手袋の先を切ってつなげるか③。
 やってみよう。



図3 話し合いの様子

教師は、A児と他の児童の会話をつなぎながら、表3波線部①では他の発想を引き出す問いかけを、表3波線部②では他の児童を巻き込む発言を、表3波線部③では他の児童から出た考えを整理してA児に提示した。その後A児は、「手ぶくろマン」を2つつくり、2つのストローを使って、園児と一緒に膨らませて楽しむ方法を思い付き、手の部分をつなぐようにつくった(図4左)。一方、このやりとりを見ていたD児(図3)は、手袋の指の部分をつなげて空気が通るようにし、手袋を2つつなげて二人の人形が手をつないで膨らむようにした(図4右)。教師が直接方法を伝えるのではなく、児童同士が考えて見つけ出すようにすることで、児童自身が解決方法を見つけて出すことにつながった。また、その様子を見ていた周りの児童にとっても造形活動のヒントとなり、自分のイメージに向かって形づくることができたと言える。以下、A児の作品と思いの変容を、表4に示す。



図4 制作中の様子

表4 題材を通したA児の作品と思いの変容

	2時目	3時目	完成作品
作品			
振り返りの記述	<p>なうのVやうで、手ぶくろマンをつくらうと、早くできあがると思います。</p> <p>今日の授業で、手ぶくろマンをつくらうと年長さんが喜んでいいです。早くできあがると思います。</p>	<p>手ぶくろをつなげる時のやり方が分からなかったけど、中野先生が教えてくれたからなるほどと気付いた。</p>	<p>かたちは人っぽくて、いろはくろとあかピンクです。ふくらましたもののタコまえは、手ぶくろマンです。</p>
教師の分析	1時目に思い付いた「手ぶくろマン」を、手袋の形を生かしてつくっている。また、幼稚園児と作品で遊ぶことを楽しみにしている。	具体的な完成イメージをもち、幼稚園児と遊ぶことを意識して造形活動を進めている。教師や他の児童との話し合いの中で、多くのつなげ方があることに気付いている。	作品を説明しようとする記述から、作品に対する満足感をもっている。紙コップからとび出た後、幼稚園児が膨らませられるよう工夫している。

題材を通して、**A児**はつくりたい、工夫したいという思いを持続し、表したいイメージをもって造形活動を進めた。途中、試したり友達と膨らませたりしながら表したい思いをふくらませ、袋の組合せ方を工夫して自分の思いを実現させることができた。教師が「サポートプラン」をもとに個々の活動を見つめ、個に応じた支援を行うことで、思いの実現に向かって児童が造形活動に取り組み続けることができたと言える。

(5) 形や色などにこだわる造形活動を引き出す学習環境の工夫について（柱2）

ここでは、3時目における**B児**の活動を通して、学習環境の工夫の有効性について述べる。活動場所を固定せず自然と友達や材料と関わる場面ができるように、材料（ストロー、ポリ袋、紙パック等）や色・飾り（色ペン・色画用紙・色セロハン）、穴あけ（きり）と各コーナーを分けるとともに、1時目での取組で見られた形や色、組合せ、袋の数、膨らませ方など造形活動のヒントとなる掲示物を置き、互いの活動が見えるように机をつなげて配置した。3時目の場の様子と**B児**の動きの軌跡を示した図5から、教室中を動いている**B児**の様子が分かる。授業の導入後、すぐに材料コーナーで必要な材料を確保した**B児**は、

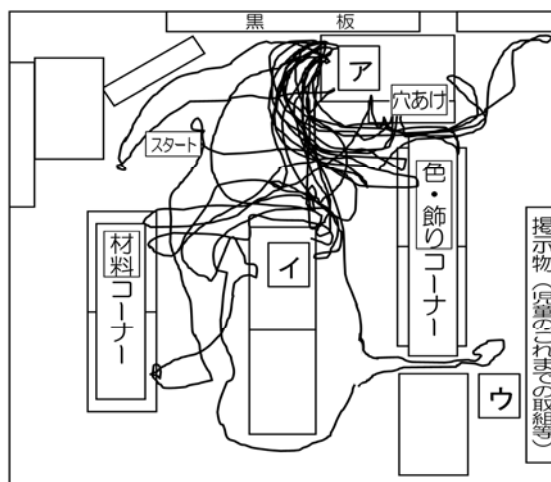


図5 場の様子とB児の動きの軌跡

黒板近くの机と教室中央の机を行き来しながら、造形活動を進めた（図5ア、イ）。アは初めに用具を置いていた場所で、人が少なく、落ち着いて造形活動を進めていた。一方イでは、多くの児童が集まって造形活動を進めており、**B児**はイで友達の様子を見て（図6）、造形活動のヒントを得ていた。途中、別の児童と関わったり、掲示物を見て自分の活動を確認したりしながら（図5ウ）、時間いっぱい造形活動が続いていた。これまでどう表したらよいか思い付かず、没頭することが少ない**B児**であったが、自由に動きながら自分の造形活動のヒントを得ることで、表したい思いを持続してつくり続けることができた。以下、**B児**の作品や様子と思いの変容を、表5に示す。



図6 友達の作品を見るB児

表5 題材を通したB児の作品や様子と思いの変容




	2時目	3時目	完成作品
作品や様子			
振り返りの記述	ふくらまして自分の名前と絵を かいた。	はこのなかから、くしゃくしゃに いれたらでてこなくなる は この中にくしゃくしゃに入れたら、 出てこなくなる。	ふくらえんせいや みんなと いっしょにあそんで どうでしたか？ たのしくできたりひらひらしてハッピーに なれたおもしろかったです
教師の分析	ポリ袋が膨らむ様子を楽しんでいる。膨らむ仕組みをつくる技術面に問題はないが、何をつくらうか具体的なイメージが思い浮かんでいない。	友達が袋をつないで長くしている様子を見て、箱を2つつなぐことを思い付く。長くなると、入れ方を考えなければとび出ないことに気付いている。	袋と箱を2つつないで、長く出るようにし、ぐんぐんのびる様子を楽しんで表した。また、幼稚園児を楽しませることができ、達成感を味わっている。

題材を通して、**B児**は材料に触れ、友達や掲示物などをヒントにししながら、自分のペースで造形活動に向かうことができた。題材終了時には、自分の取組や作品に自信をもち、達成感を味わっている。活動場所を固定しないことで、他の児童も自然と友達と関わりながら、できた作品を膨らませて友達と見せ合ったり、悩んでいることを友達や教師に尋ねたりしながら作品をつくり進めることができた。

(6) 児童が思いをつなげる各時間の導入と終末の工夫について (柱3)

各時間に、自分の思いや活動を確かめる導入と、本時の振り返りを行った。3時目の導入では、前時までの活動を画像で振り返るとともに、幼稚園児をびっくりさせるという題材のゴールを確認し、自分の活動について話し合わせた。振り返りでは、うまくいったことや困ったこと、次にしたいことを想起させ、次時の方向性を確認した。以下、2時目から3時目にかけての**C児**の様相を中心に述べる (表6)。

表6 2時目から3時目における**C児**の作品と思いの変容 (T:教師 C児:抽出児 S:その他の児童)

2時目の作品と振り返り	3時目導入時と活動中の関わり	3時目終了時の作品と振り返り
 <p>図7 2時目の作品</p>	<p><u>導入時の話合いの様子</u></p> <p>T: (画像で前時の様子を振り返り) 今日自分が何をしたいか友達と話してごらん。</p> <p>S1: ここに穴を空けて色を塗る。</p> <p>S2: 袋に絵を描く。</p> <p>C児: <u>つなげる①</u>。</p> <p>T: 何と何をつなげるの?</p> <p>C児: この袋を (他の袋とつけて、一度にとび出すように)。</p>	 <p>図8 3時目終了時の作品</p>
<p>びっくりハッピーボックスはすごく楽しくて、作り方は簡単です。今度は4こつけてみたいです。</p>	<p><u>活動中の関わり</u></p> <p>C児: 先生2こできたよ。</p> <p>T: すごいね。つながった?②</p> <p>C児: つなげてはいないけど…</p> <p>T: <u>もしかして、ここからふいたら2つでてくる?③</u></p> <p>C児: 違う、ここから・・・</p> <p><u>そうだ、つなげよう④。</u></p>	 <p>2つストローをつなげて、真ん中に吹くストローをつなぎました。</p>

C児は試しの活動の際、細長いポリ袋の先に手袋をつなげ、手が伸びるようにしたいと考え、2時目には2つの袋をつなげて伸びるようにすることができた (図7)。振り返りにおいても、「4こつけてみたい」と、袋をたくさんつなげてつくりたい思いが窺える。3時目の導入時には、自分がしてみたいこととして「つなげる (表6下線部①)」と話している。前時からの思いを持続し、本時において具体的な造形活動のイメージをもっていることが分かる。**C児**が袋の数を増やし、つなげたいと意識していることを教師は確認していたので、活動中に**C児**が尋ねてきたときに、表6下線部②のように、児童が導入時に抱いていた思いを確認した。そして、「つなげる」工夫に意識が向くようにヒントを与えた。(表6下線部③)。**C児**は数を多くすることに意識が向かっていたが、袋が出てくる場所を確認しながら、つなげるイメージを思い付き (表6下線部④)、1つのストローから空気を入れると、2つの袋が膨らんで出てくるように、作品をつくりあげた (図8)。振り返りの記述には、2つの袋が同時にとび出る様子を7コマに分けてかくなど、自分の工夫を誇らしく思い、頑張ってやり遂げた満足感を得ていることが窺える。

導入と終末時に思いを表出する場面を設けることで、児童は自分の思いを確認しながら、イメージに向かってつくり続けることができた。また、教師はその思いを確認することができ、「サポート

プラン」に基づきながら、活動中に思いをくみ取った言葉かけを行うことで、児童の思いを造形活動につなげることができた。

(7) 全体の結果から

題材後のアンケート（表7）から、多くの児童が材料（32名、91%）や友達との関わり（29名、83%）の中で思いを表していたことが分かる。具体的なイメージをもってつくり進めたA児も、友達との関わりが役立ったと感じている。B、C児は、ほとんどの項目が役に立ったとしているが、多くの関わりの中で、思いを持続して造形活動を進めることができたという満足感の表れ

でもある。ヒントコーナーについても、場に掲示されていることで目を向け、活動や工夫のヒントとなったと言える（19名、54%）。一方、「先生と話して」が他の項目に比べて少ない（13名、37%）。これは、「サポートプラン」に基づき、技術的な支援については具体的に行ったが、発想については友達との関わりを促したり、ヒントを与えて判断を児童に委ねたりした結果であり、児童が過度に教師に頼らず、自らの思いを表そうとしたからだと言える。また、1時目後のアンケートと題材後のアンケート結果（表8）からは、どの項目も全体的に高い達成感を維持して取り組んでいたことが分かる。

表7 題材後のアンケート結果

思いを表すために役に立ったもの（複数回答）全35名		
・材料に触ったり、膨らませたりして（A, B, C児）	32名	91%
・友達と話したり、聞いたりして（A, B, C児）	29名	83%
・友達のつくっている物を見て（B, C児）	27名	77%
・ヒントコーナーを見て（B, C児）	19名	54%
・先生と話して（B児）	13名	37%
・自分でやりながら思い付いた（A, B, C児）	27名	77%
・その他（B, C児）	21名	60%

表8 1時目と題材後のアンケート結果（人）（全35名）

造形的な関心・意欲・態度に関する項目	1時目：どんだん袋を膨らませたり、考えたりすることができた。	31	3	1
	題材後：一生懸命つくって、自分の思いを表すことができた。	35	0	0
発想や構想の能力に関する項目	1時目：出てくる物やつくりたいものが、たくさん思い付いた。	29	6	0
	題材後：思いに合うように、形や色、組合せ方を思い付いた。	27	7	1
創造的な技能に関する項目	1時目：袋とストローをつないで、膨らませることができた。	28	5	2
	題材後：形や色などを工夫しながら、つくることができた。	29	3	3

■とてもよくできた □よくできた □できた *「あまりできなかった」は0人

発想や構想の能力における回答では、1時目後は「とてもよくできた」が29名（83%）と多く、試しの活動において児童がつくりたいもののイメージを広げていることが分かる。また、関心・意欲・態度に関する項目の回答では、1時目後31名（88%）から題材後35名（100%）となっており、全員が思いを造形活動につなげながらつくり続け、達成感と満足感をもって題材を終えたことが分かる。これは、自由に材料に触れながら、思い付いたことを試し、つくり、やり直し、友達と関わり、またつくり、を繰り返しながら、児童個々のペースで思いを表すことができたからだと考える。さらに、自分がつくった作品で幼稚園児と楽しく交流し、喜んでくれたことは、自らの造形活動の価値をより見いだすことにつながったと言える（図9）。

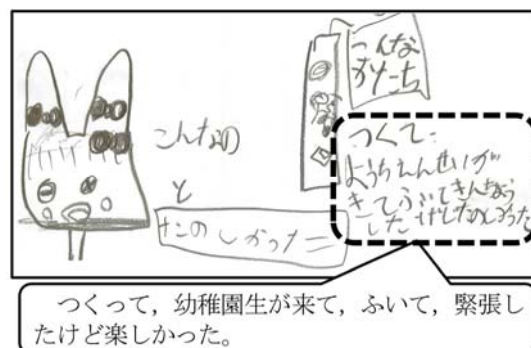


図9 題材後の児童の感想

5 まとめ

(1) 成果

- ・ 「サポートプラン」を基に、児童の思いをくみながら、個に応じた言葉かけや支援を行うことで、児童が自らの思いを表し、つくりだす喜びを味わうことにつなげることができた。
- ・ 児童の動きが流動的になるように学習環境を工夫することで、材料や友達と関わりながら自分の思いの実現に向かわせることができた。
- ・ 各時間の導入、終末時にこれまでの取組やしたいことを言葉に表出させることで、児童の思いをくみながら「サポートプラン」を活用することができ、児童の思いを造形活動につなげることができた。

(2) 今後の課題

- ・ 「サポートプラン」の内容を整理し、どの題材においても効果的に活用することができるようにするとともに、個々の思いに寄り添った深い対応ができるようにする必要がある。
- ・ 児童の生活に関連のある題材を通して、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力及び態度の育成が図られる図画工作科の授業づくりに取り組む必要がある。

【参考文献】

- ・ 佐賀大学教育学部附属小学校『研究紀要 第4号』平成29年11月
- ・ 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説図画工作編．日本文教出版株式会社

【参考URL】

- ・ 国立教育政策研究所『小学校学習指導要領実施状況調査教科別分析と改善点(図画工作)』平成27年2月 http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_h24/index.htm
- ・ 文部科学省中央教育審議会『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）』平成28年12月21日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm